

法華寺旧境内の調査

— 第544次・第547次

1 第544次調査

はじめに

この調査は、共同住宅建設にともなうものである。調査地は、左京一条の法華寺旧境内の北辺に位置する。調査地の北に隣接する一段高い東西方向の地割が一条条間路に相当するもので、周辺の調査ではその南側溝を検出している。

法華寺旧境内北部の様相を示すこれまでの調査成果としては、今回の調査地の南西約50mの地点で実施した第430次調査において、平安時代の初頭の施釉陶器を多量に含む土器廃棄土坑を検出していることなどがあげられる（『紀要 2009』）。

調査は、2015年1月13日から2015年2月6日まで、東西9m、南北14mの126㎡について実施した。

基本層序

調査地の基本的な層序は、現地表から造成土（約10～20cm）、耕土（水田・桑畑として利用した際の耕作土。約10～30cm）、床土（約10～20cm）と続き、その直下の現地表下約40～60cmで、明黄褐色粘土の地山面に達する。遺構面直上まで近世染付など比較的新しい時期の遺物を含む。耕作土直下には多数の南北溝（耕作溝）が認められたが、

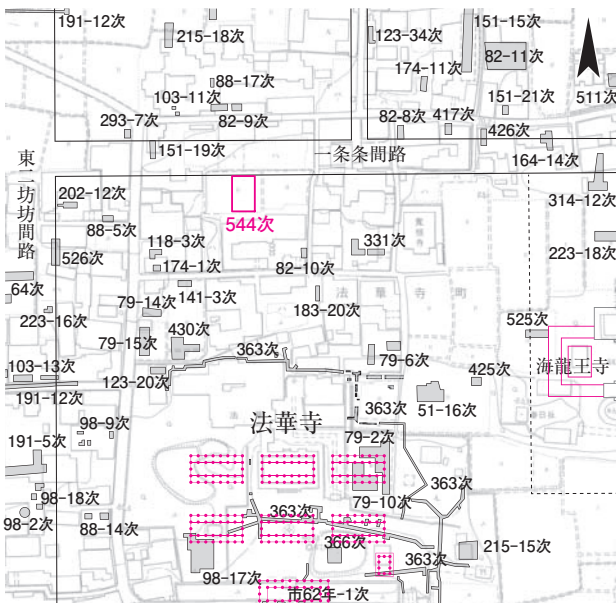


図185 第544次調査区位置図 1:3000

その他の遺構は基本的に地山面で検出した。地山面の標高は概ね69.10～69.20mで、調査区の南北での傾斜は認められない。

遺構

検出した主な遺構は、柱列2条、土坑1基、井戸2基、単独の柱穴1基、竹管理設斜行溝1条、土取り穴多数などである。

まず、奈良時代とみられる遺構には、南北柱列1条、東西柱列1条、単独の柱穴1基、円形土坑1基がある。

南北柱列SA10915 調査区中央から南にのびる柱列で、10尺等間で並ぶ柱穴3基を検出した。掘方は一辺90～100cm程度の方形で、柱はいずれも抜き取られている。検出面からの深さは30～50cmあり、底面の標高は68.70～68.80mでほぼ揃う。東西柱列SA10920よりも古い。

東西柱列SA10920 調査区中央南寄りに位置する柱列で、10尺等間で並ぶ柱穴3基を検出した。東西80cm、南北60cmのやや東西に長い掘方をもつ。柱はいずれも抜き取られているとみられ、中央の柱穴には多数の人頭大の

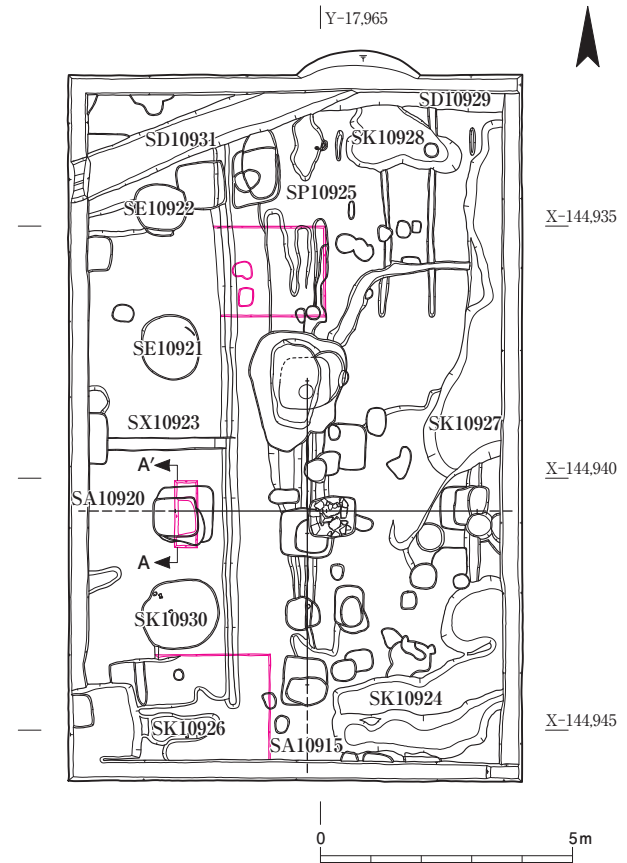


図186 第544次調査区遺構平面図 1:150

石や瓦が投棄されていた。南北柱列SA10915よりも新しい。検出面からの深さと底面の標高は、西の柱穴は80cm・68.30m、多数の石が投棄されていた中央の柱穴は30cm・68.90m、東の柱穴は70cm・68.60mとまちまちである。また、東の柱穴は位置が少し北にずれ、掘方の形状もやや異なり方形に近い。このため、これら3基の柱穴は一連の東西塀にはならない可能性もあるが、3基とも南北に組み合う柱穴は認められなかったため、一連のものと考えておく。西の柱穴の抜取穴(図187参照)からは、漆紙文書の小片1点が出土した。

柱穴SP10925 調査区北端近くで検出した単独の柱穴。東西80cm、南北100cmのやや南北に長い掘方を持ち、検出面からの深さは約30cmと浅い。北側に柱を抜き取っているとみられる。

円形土坑SK10930 調査区西南隅で検出した、東西1.4m、南北1.5mのやや東西に長い円形を呈する土坑。瓦が多数投棄されていた。深さは約30cmと浅い。

次に、中世以降の遺構としては、井戸2基、竹管埋設斜行溝1条、土取り穴多数などがある。

井戸SE10921 調査区中央西寄りで検出した径約1mの素掘りの円形土坑で、井戸とみられる。検出面からの

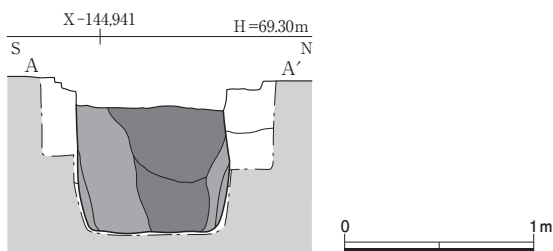


図187 SA10920漆紙文書出土柱穴断面図 1:40



図188 第544次調査区全景(北から)

深さは1.2m以上ある。近世以降の遺構とみられる。

井戸SE10922 SE10921の北約3mの調査区西北部で検出した径約1mの素掘りの円形土坑で、SE10921に類似し、同様に検出面からの深さは1.2m以上ある。近世以降の遺構とみられる。

斜行溝SD10931 調査区西北隅で検出した幅約1mの斜行溝。検出面からの深さ約1.4mの底部に、径6~7cmの竹管を確認し、水抜き用の竹管埋設掘方であることが判明した。近世以降の遺構であろう。

このほか、調査区の西南隅部、東南隅部、東辺、東北隅部で、多数の不整形の土取り穴状の遺構群を検出した。このうち調査区東北隅のSD10929のみは、SD10931より西にはのびず北限も調査区外で明瞭ではないものの、南限に直線的な輪郭をもっているため、東西溝の可能性を考えた。また、調査区の西より3分の1の範囲には、方形の浅い掘込みがみられ、近世以降の建物の基礎地業などの可能性が考えられる(SX10923)。(渡辺晃宏)

遺物

土器 古代から近世にいたる土師器・須恵器・瓦器・陶磁器など、整理用コンテナ4箱分の土器が出土した。図190は、SD10931から出土した土師器皿2点で、いずれも灯明に使用されたとみられるススが口縁部に付着す



図189 交差する柱列(西から 中央手前の柱穴から漆紙文書が出土)

る。1は口径11.4cm、器高2.3cm、2は口径11.3cm、器高2.7cm、ともに口縁部内外付近をヨコナデし、ほかは無調整で体部に指頭痕を残す。2点は、ともに灰白色を呈するいわゆる白土器で、形態的な特徴からみて、いずれも17世紀前後の所産と考えられる。(青木 敬/客員研究員)

瓦磚類 奈良時代から近世までの瓦(整理用コンテナ16箱分)が出土した。内訳は表32に示すとおりである。

(今井晃樹)

木製品・石製品 焼きさし1点、石製品5点がある。図191は砥石で、SD10929から出土した。四方が折損しており、中央部のみが残る。表裏面ともに長軸に対して斜行あるいは平行する擦痕が残るが、擦痕は1本1本が細く、数も少ない。長さ10.1cm、幅3.2cm、厚さ1.1cm(すべて残存値)。頁岩製。(芝康次郎)

漆紙文書 東西柱列SA10920の西柱穴抜取から1点が出土した(平城京漆紙文書第59号とする。図192)。墨痕はオモテ面から観察できるが、筆画からみて左右反転しており、漆面に書かれているとみられる。1行目に2文字、2行目に1文字の墨痕を確認できる。罫線などはみられない。

今回の資料は微細な断片でかつ判読はできないものの、周辺に漆を扱う現業部門が存在したことを示唆する資料として貴重である。なお、同じ柱穴からは土器片数点が出土しているが、漆の付着したものはみられない。

(古尾谷知浩/名古屋大学・渡辺)

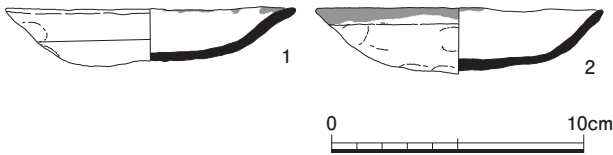


図190 第544次調査出土土器 1:3

表32 第544次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6138	B	1	6667	A	2	割鬘斗瓦(近代)	1	
巴(近世)		1	6675	A	1	瓦製円盤	1	
中世		1	近世		1			
時代不明		1	型式不明(奈良)		1			
計		4	計		5	計	2	
		丸瓦			平瓦	磚	凝灰岩	レンガ
重量		21.351kg			77.696kg	0	0	0
点数		188			879	0	0	0

まとめ

今回の調査は、調査区が狭小なこともあり、まとまった建物を検出するにはいたらなかった。しかし、塀状の遺構とはいえ、10尺等間の柱間をもち、また柱穴自体も比較的規模の大きい遺構を確認したことは、法華寺境内において、敷地の周辺まで計画的な土地利用がなされていたことを示す。また、南北柱列が3基目でとぎれていることは、ここが敷地北端であることと関係するとみられる。これらは平城宮に隣接する法華寺旧境内に相応しい遺構といえるだろう。

今後も周辺の発掘調査事例を地道に積み重ねていけば、藤原不比等邸、法華寺、そして光明皇太后や孝謙太上天皇の居住空間である宮寺としても利用されたこの地の様相が、より明確になっていくことが期待できよう。

(渡辺)

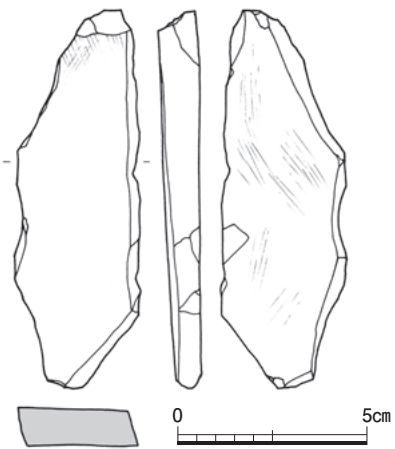


図191 出土砥石実測図 1:2

五九
□□

法華寺旧境内出土漆紙文書積文
(第五四四次調査)

6
A
F
F

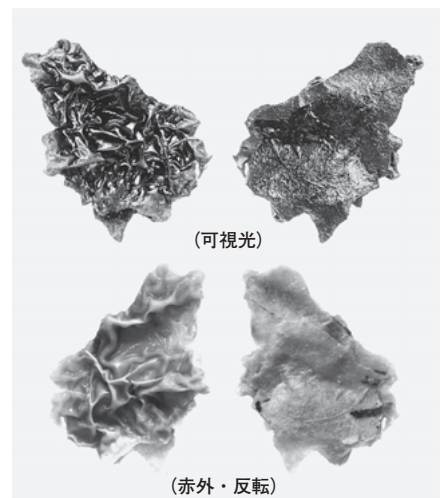


図192 第544次調査出土漆紙文書の積文と写真

2 第547次調査

はじめに

本調査区は、法華寺旧境内にあたり、現法華寺本堂から約120m南に位置する(図193)。周辺では、小規模な発掘調査がおこなわれており、調査区東に隣接する第442次・第532次調査では、奈良時代の東西棟掘立柱建物や掘立柱塀を検出した(『紀要 2009』・『紀要 2015』)。これらの遺構は法華寺あるいはその前身である藤原不比等・光明子邸と関わる可能性が高く、今回の調査でもこれらの遺構が検出されることが予想された。

調査は住宅建設にともなうものであり、調査区は建設予定地にあわせてⅠ～Ⅲ区の3ヵ所に分けて設定した(図194)。調査面積は、Ⅰ区が153㎡、Ⅱ区が58㎡、Ⅲ区が81㎡である。発掘調査は2015年4月2日に開始し、同月28日に終了した。

基本層序

基本層序は調査区ごとに異なる。Ⅰ区の層序は、①造成土(5~30cm)、②旧耕土(5~20cm)、③床土(5cm)、④黄褐色泥土(奈良時代の整地層:5~10cm)、地山。地山はY-17,965付近で変化し、Y-17,965以西が灰色砂土、以東が暗青灰色シルト混砂礫土となる。遺構は④層もしくは地山面で検出した。遺構の検出面は、標高63.40mである。

Ⅱ区の層序は、①造成土(10~30cm)、②旧耕土(15~30cm)、③床土(5~15cm)、④褐色粗砂混粘質土(中世の整地層:10~40cm)、地山(灰白色粗砂土)。遺構は地山面で検出した。遺構検出面の標高は64.2~64.5m。Ⅱ区は洪水等による土砂の流入で大きく地山が削られているとみられ、遺構検出面の凹凸が著しい。④層は、中世の瓦を含み、中世の段階で、周辺を平坦にするための整地をおこなったとみられる。

Ⅲ区の層序は①造成土(30~90cm)、②旧耕土(10~30cm)、③床土(10~30cm)、地山(褐色砂土)。地山面の標高は、64.3~64.5mである。

検出遺構

主な遺構として、Ⅰ区で掘立柱建物1棟、東西塀1条、土坑2基、Ⅱ区では土坑1基を検出した。Ⅲ区は後世の削平が著しく顕著な遺構が検出できなかった。

掘立柱建物SB9205 第442次・第532次調査で検出した

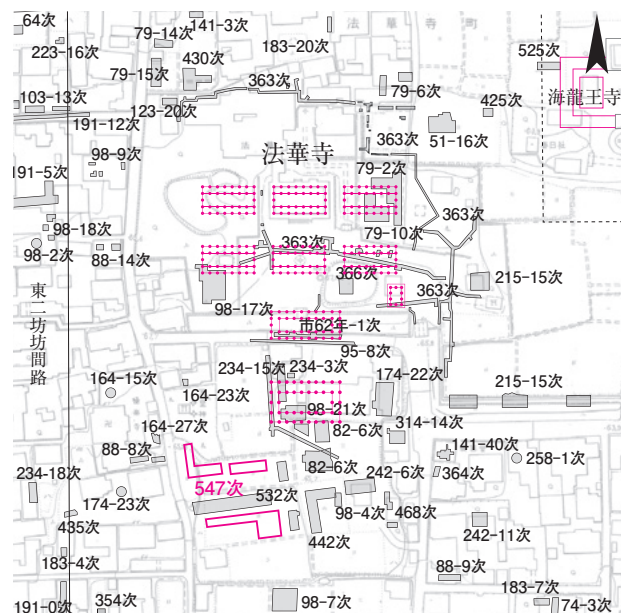


図193 第547次調査区位置図 1:3000

奈良時代の掘立柱建物をⅠ区東部で検出した。柱穴は西妻柱を含め、6基検出し、桁行3間分、梁行2間分を確認した。柱間寸法は桁行、梁行ともに3.0m(10尺)。柱穴は一辺1.4mの隅丸方形で、残存する深さは1.0m(図195)。径20.0cmの柱痕跡をもつ。柱掘方・抜取穴からは遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

SB9205は今回の調査とあわせ、桁行9間、梁行2間以上の東西棟建物が想定できる。なお、西側の廂柱の有無を確認するため、廂想定位置に東西1m、南北1mの拡張区を設定したが、後世の削平により柱穴は確認できなかった。

掘立柱塀SA9215 第442次・第532次調査で検出した掘立柱塀から続く柱穴3基をⅠ区北部で検出した。柱穴は一辺1.0~1.1m、残存する深さは5~10cmと浅い(図195)。柱間寸法は3.0m(10尺)。SA9215はこれまでの調査とあわせ8間分になる。なお、西端の柱穴からもう1間西に続く可能性があるが、想定位置に後述する土坑SK10935があるため確認できなかった。

SA9215は、本調査区で検出したSB9205と、第98-4次・第442次調査で検出したSB9210と柱筋が揃う。SB9210南側柱からの距離は3.0m、SB9205北側柱からの距離が1.3mであることを考えると、梁行、桁行と柱間寸法が同じSB9210の建物の南廂柱である可能性もある。ただしSB9210は第98-2次・第442次調査で東妻を含む4間分を検出しているものの、本調査区の範囲外で全貌は不



Y-17,950

Y-17,970

Y-17,990

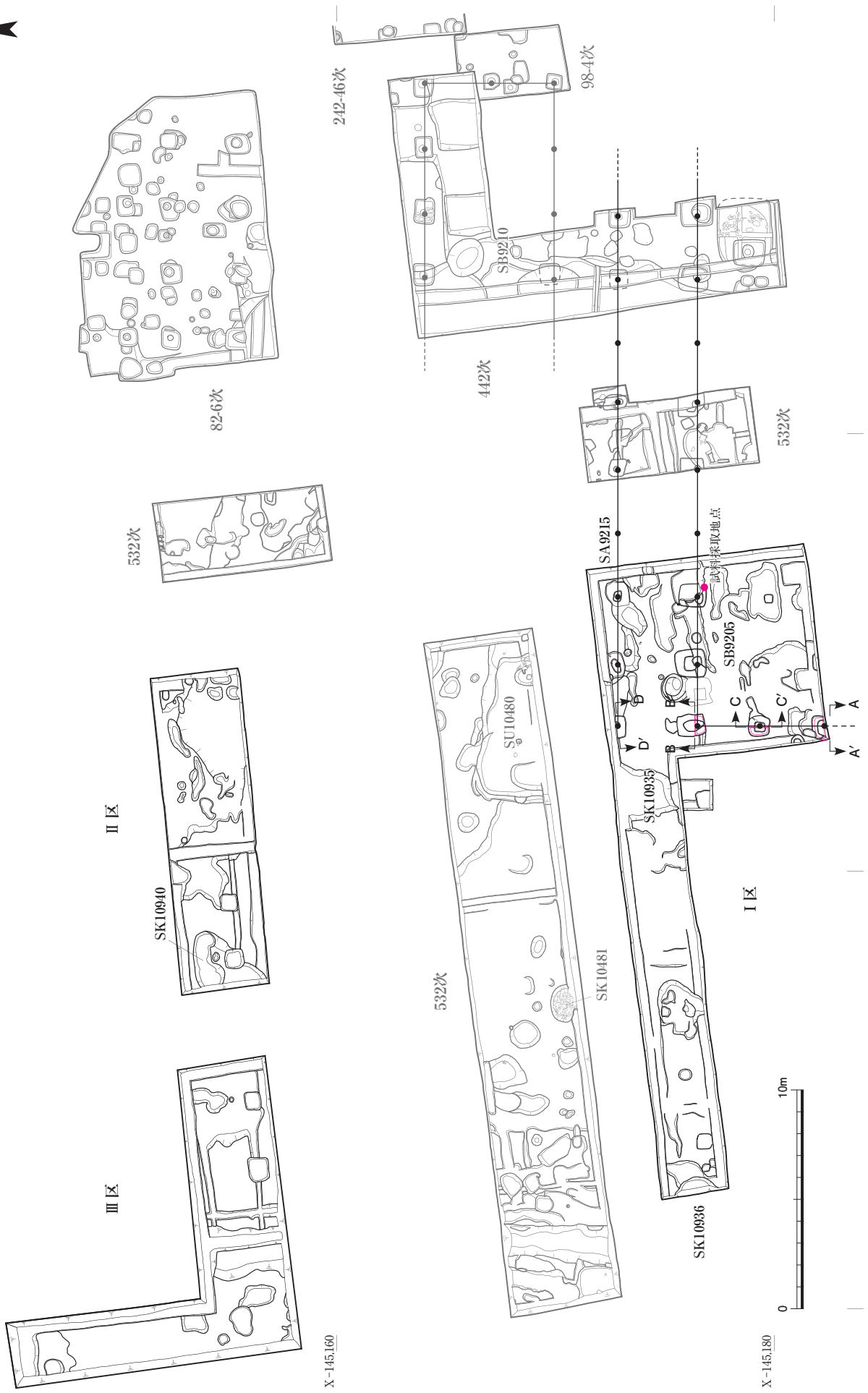


图194 第547次調査区遺構平面図 1 : 250

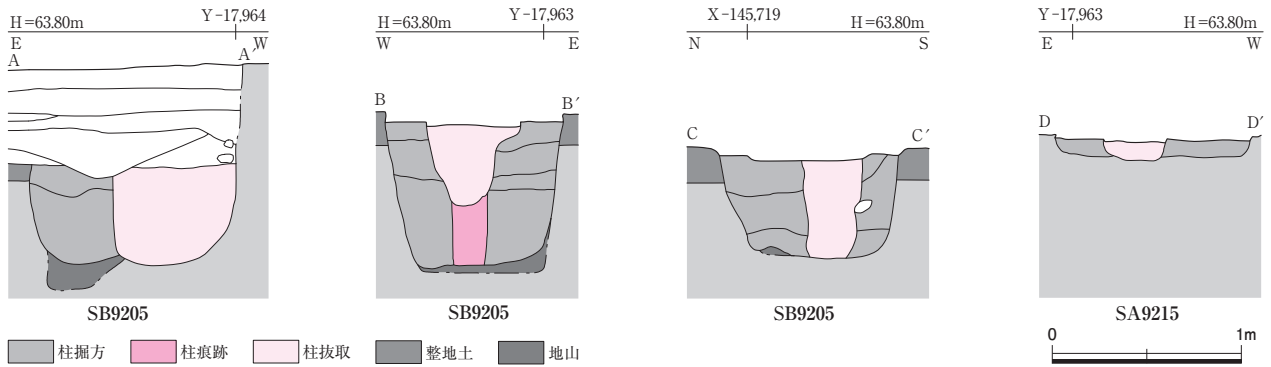


図195 第547次柱穴断面図 1 : 40



図196 第547次Ⅰ区全景(北東から)

明である。さらにSA9215を廂とすると、SB9205およびSB9210の軒先が干渉する可能性がある。したがって今回は従来どおり掘立柱塚として報告した。

大土坑SK10935 調査区中央で検出した。東西3.1m、南北3.0m以上、深さ約30cmの大土坑。埋土には中世の土器や瓦を含む。

土坑SK10936 Ⅰ区西壁で検出した。大きき1.8m以上。深さ約90cm。近世の遺物を含む。井戸の可能性はある。

土坑SK10940 Ⅱ区西端で検出した。大きき3.0m以上。深さ約0.5m。埋土には古代から中世までの瓦を大量に含む。

出土遺物

瓦磚類 本調査区から出土した瓦磚類を表33に示す。古代から中世までの瓦磚類が確認できるが、全体的に中世のものが多。以下、軒瓦と磚を中心に報告する。

図197の1～4は軒丸瓦。1は6314E。法華寺旧境内で出土する小型軒丸瓦である。平城宮・京瓦編年でⅡ-1期にあたる。2は6138B。法華寺金堂の所用とされる。SK10935出土。Ⅲ-1期。3は瓦当に「法」の古字体をかたどる。薬師寺にも同范例がある(『薬師寺報告』)。平安時代。4は右三巴文軒丸瓦。鎌倉時代。5～11は軒平

表33 第547次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数	
6138	B	1	6667	D	1	平瓦(釉薬?)	1	
6314	E	1	6688	Ab	1	(刻印)	1	
奈良		3	6714	A	3	鬼瓦(中世)	1	
巴(中世)		7	6721	I	2	面戸瓦	1	
中世		1	奈良		2	水波文磚	1	
時代不明		3	中世		7	磚(施釉)	1	
			時代不明		2	隅木蓋?	1	
軒丸瓦計		16	軒平瓦計		18	その他計		7
		丸瓦			平瓦	磚		凝灰岩
重量		92.8kg			246.8kg		3.7kg	10.8kg
点数		629			2028		7	33

瓦。5は6647D。胎土・焼成から本来は施釉であった可能性が高い。Ⅱ-2期。SK10935出土。6は6688Aa。Ⅱ-2期。7は6714A。法華寺金堂所用とされる。Ⅲ-1期。8は6721I。Ⅳ-1期。6・8はこれまで法華寺旧境内ではほとんど出土例がない。両者とも平城宮では東方官衙地区に比較的多く出土する。9は均整唐草文軒平瓦。10は珠文軒平瓦。11は瓦当に小型の左三巴を配する巴文軒平瓦。9～11は鎌倉時代。

このほか、奈良時代の緑釉水波文磚1点、単彩無文磚1点が出土している。12は長さ15.2cm、残存幅8.0cm、厚さ4.0cmの緑釉水波文磚。上面にはヘラで水波文を描き、下面には「七条冊」のヘラ書きがある。釉薬の残存は良好ではないが、上面のみにある。下面に番号をもつ施釉磚は、第532次調査など、法華寺旧境内においていくつか出土例がある(『紀要2015』)。須弥壇に磚を敷く際の番付と考えられる。また、磚を敷く際におさまりをよくするための、いわゆる「逃げ」がある。13は残存長9.0cm、幅7.7cm、厚さ3.7cmの施釉磚。褐色の単彩で、上面と長手の片面に施釉がある。これまで法華寺旧境内では水波文磚や刻線文磚等、施釉磚が比較的多く出土しているものの、長方形の単彩施釉磚の出土は初めての例である。

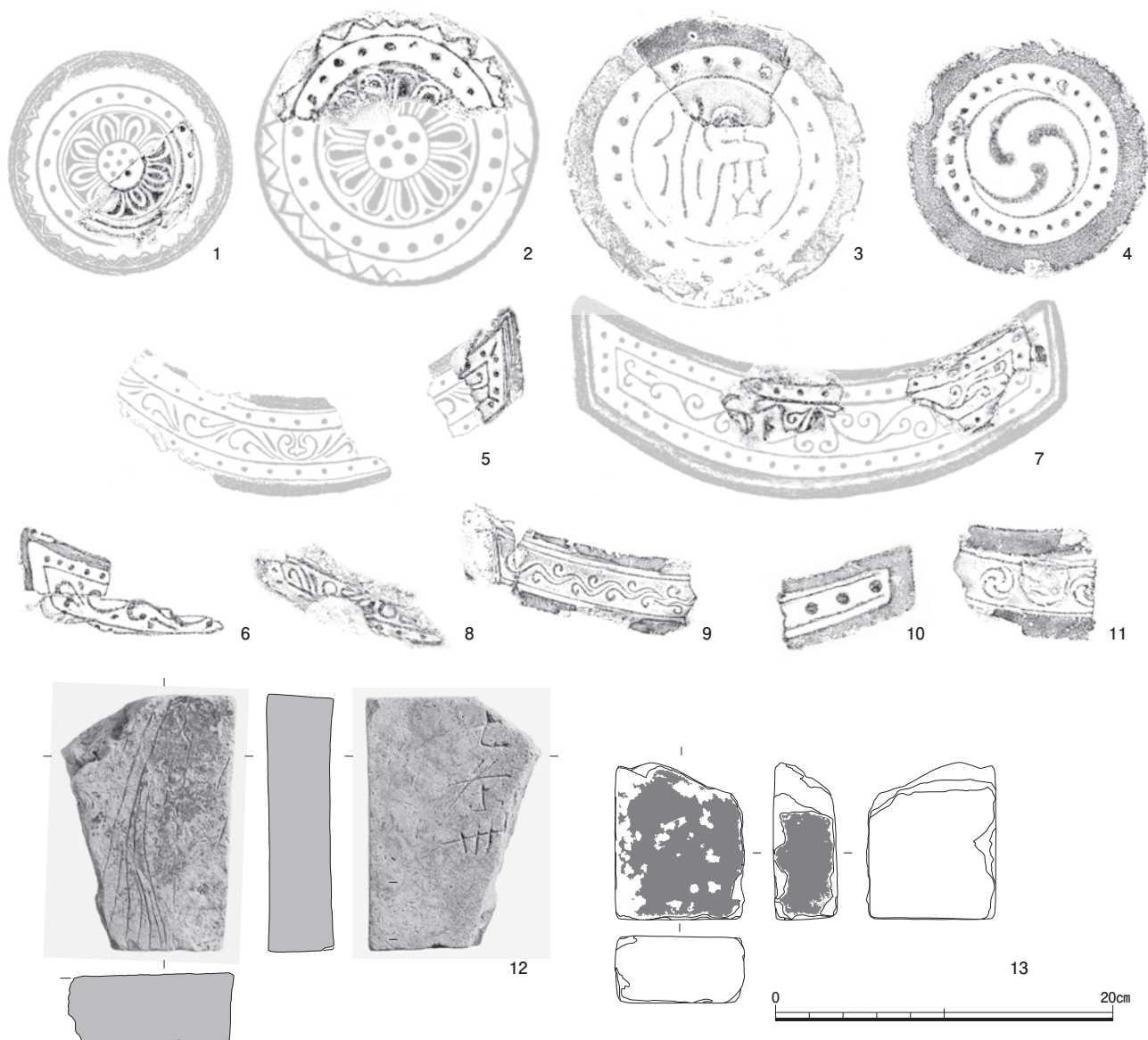


図197 第547次調査出土軒瓦および施釉磚 1 : 4

12・13ともに土坑SK10935から出土した。

土器類 本調査区からは、遺物用整理コンテナにして2箱分の土器類が出土した。出土した土器類は、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・陶器・磁器などがあり、時期は古代から近世まで及ぶが、中心となる時期は中世から近世である。いずれも小片であり、図示しうる個体はなかった。(石田由紀子)

軟X線撮像を用いたSB9205の地質観察

第547次調査において、建物の基礎構造を検討するために、SB9205北東隅から東に3つ目の柱穴の断割南壁面において地質切り出し試料を採取した(図194の試料採取地点)。その試料について層相観察、軟X線撮像による地質構造の観察をおこなった結果を概報する。

試料と方法 地質切り出し試料は、SB9205柱穴の断割

南壁面底部に堆積する暗青灰色のシルト混砂礫層から、上位の明灰色砂混シルトからなる偽礫を多量に挟在する黄褐色泥層(マトリックスは細~中粒砂)まで連続的に採取した(図198)。この黄褐色泥層は人為的な版築層である。試料の切り出しにあたっては、スチロール製の角形ケース(221×141×37mm)を用い、切り出す対象の壁面を浮き出させるようにして切り取った。試料は研究所にもち帰った後に成形し、層相写真撮影、層相観察をおこなった。その後、フジフィルム社製軟X線撮像装置とイメージングプレートを用いて地質構造の撮像をおこなった。**結果** 軟X線画像を図199に示す。暗青灰色シルト混砂礫層とその上位の黄褐色泥層は、構造的に明瞭に異なることがわかる。暗青灰色シルト混砂礫層は、やや不明瞭ではあるが、画像内に3層の逆級化構造がみられ



図198 SB9205柱穴断割南壁面の地質切り取り試料

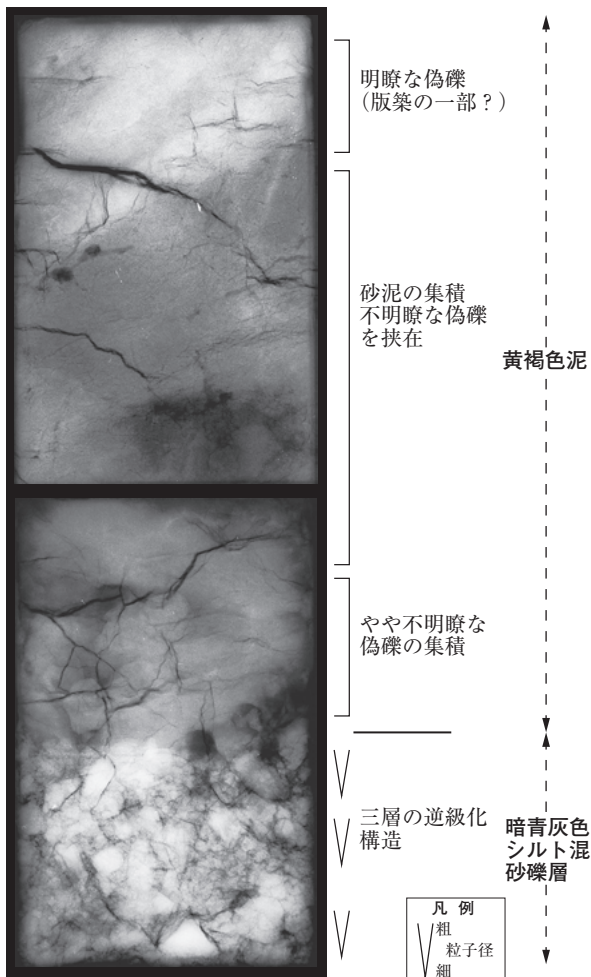


図199 地質切り取り試料の軟X線画像

る。これは急激な増水ともなう土砂運搬によってもたらされる堆積物に典型的にみられる構造であり、洪水や大水による被災があったことを示唆する。このような地質構造が典型的にみられる地域は一般的に氾濫原とされる。堆積構造にやや乱れが認められるのは、上位層の版築がおこなわれる際の方への加重の影響が考えられ

る。版築層となる黄褐色泥層は、やや構造的に不明瞭である。これは砂礫に比べ密度が低く、含水率の高い砂泥粒子から地層となるため、X線透過のコントラストが弱いことに起因する。しかしわずかではあるが偽礫の影がみえており、最上部ではかなり明瞭に偽礫が認められる。これは上部が乾燥により密度が高いためである。

小 結 調査の結果、法華寺旧境内のうち、本調査の範囲は、氾濫原の上に構築されたものであることがあきらかとなった。当地域は現在でも菰川氾濫原の中にあたり、北側からの大きな傾斜も含め、地下水位の高い集水域である。法華寺創建時には、現在よりもはるかに高い確率で大水の影響を受けたであろうことは容易に想像される。一方で、それらの河川治水がおこなわれれば、河川の運んだ砂礫層は建築物の重要な支持基盤となり、土地利用としては合理的判断といえる。 (村田泰輔)

ま と め

今回の調査では、I区東半においては奈良時代の掘立柱建物SB9205やSA9215を検出し、SB9210とあわせ、推定金堂の南約40mに大型の東西棟建物が2棟展開する状況が確認できた。

SB9205は西妻柱を確認し、第442次・第532次調査の成果とあわせると、少なくとも9間以上の東西棟建物となる。法華寺伽藍の中心軸は、本堂周辺の発掘調査成果等からY-17,947.3付近とされており(『1993 平城概報』)、これをSB9205にあてはめると、西妻から6間目の柱間心よりやや西にずれるものの、おおよそ柱間の中央に近い位置を通る。これを軸にして折り返すと、SB9215は桁行11間の建物に復元できることになる。また、第442次調査で検出したSB9210は、SB9215と東西の柱の並びを揃える。SB9210は東妻を検出しており、法華寺伽藍の中心軸は東から5間目を通る。これを同じ軸で折り返すと9間の東西棟建物に復元できる。

SB9205に関しては、柱穴掘方・抜取から遺物は出土しておらず、詳細な時期は不明である。ただし、柱穴掘方や整地土から瓦が出土しないことを勘案すれば、法華寺造営以前の建物とみることもでき、藤原不比等・光明子邸に関わる法華寺前身遺構の可能性がある。しかし、本調査区を含め、既往調査はいずれも発掘面積が小規模で、検出した遺構も部分的なものが多く、その全貌は不明な点が多い。今後の周辺地の調査を待ちたい。(石田)